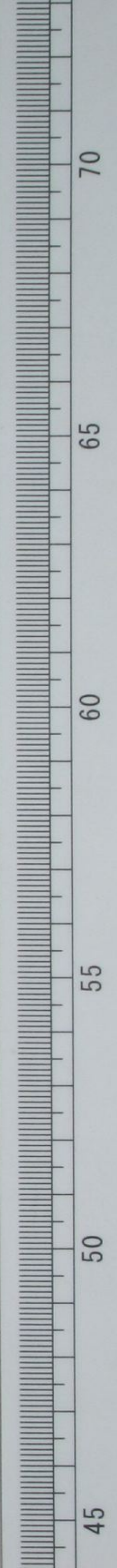


文庫 14

本間文庫  
文庫 14  
A134



隨行隨誌  
田毎情史  
水蔭真著作自序  
からがね  
花の杖  
漁村の柳  
袖の月影  
戯作くらげ

時の子

櫻の系

言問はる

お馬く馬

旅函師

白系

わらがゆ

そこの杖

海家娘

雛の鳥

娘の禮

尾花川

櫻月



隨行隨誌

時在礪川橋好塾

水陰外史稿

明治十九年三月十二日 晴 正午十二時出程樂水  
 館前ニ直線ニ至ル程無慮三所道石ニ下分  
 スお折シ又左折シ坂下リ進ム川ニ渡ス小  
 木橋アリ此レゾハ犬傳ノ古跡猫又橋ナラシト思ヒ  
 路傍ノ農夫ニ聽ク農夫答テ此レハ祇園橋ナリト云  
 フサラバ猫又橋ハ術処ナリ也ト問ヒシニ此ノ川上ニ  
 アリト答フ由リ川ニ沿ヒテ行キ事一里弱一ツ水  
 車アリ水車場ハ四五日前燒失セシト見ヘ  
 テ鳥有トナリ案ニ哀レ有録ナリ夫トヨリ少シテハ

柳の糸

# 田毎情史

彈臺藏



人  
算  
稿

竹即書百さらバウ又さる  
不分明あり

石橋アリ山美ニ此猫又橋ナリ地石六枚ニ成ス  
 ツマラマ橋ナリ夫レヨリ坂上リ右枚少シ四分石  
 折スレモ氷川神社ノ裏門ナリ神殿ニ并ニ表門ヨリ  
 石段下リ植物園ヲ沿ヒ行キ半所右折  
 シテ宗廟寺ノ前ナリヨギあ路竹早出テ歸  
 ル時ニ二時頃ナリヤ  
 明治九年三月五日晴 角 豊島 松原 三  
 子ト午後六時ヨリ散步為シ猫又橋ニ至リ夫ヨリ  
 特ニ早キ以テ川沿ヒ行キ定ノ行事トシテ水  
 車場ナリ此所ヨリ水漸ク深ク墮テ濁ル此所ニ余  
 ノ推測カカニテ木ノ如ク有リ杖トシ  
 進ム事申所一線ニ他ニ轉ズル由シ今更  
 歸ルモ何トヤラ先道ノ上ニテハ其ニト余先録  
 トナリ行ツ特ニ日西書ニ及テ月輪動ク先ヨリ

と田 腹稿

- 田 舎結景
- 田 港泊記
- 田 毎情史

田毎情史

彈堂龍光作

初立日の巻

一 昼

年立歸る新玉の。やはらぐ風のちるへより。梅子来て鳴  
 く鶯の。声<sup>こゝろ</sup>をたづねて庭づたい。まだ年若き此の屋ノ  
 殿君。つきそふ傳<sup>ついで</sup>山井平信。あたり見廻し声低く。  
 侍前最早や鶯の馬興も是れよて止め玉へて先づ  
 あれある侍茶屋よて暫くお休へ候へよ。もゆる野邊  
 の緑の若草。又一段玉重白く候と。進め殿君うさ  
 づき玉ふ。いざ行ちんとはかりよて。侍茶屋をさして歩  
 と玉ぬ。風雅をたねとすお庭の結構。山の紅ひ緑の淵  
 怪の石の水は均玉ぬ。虎の水を飲ま居る風あり。籠る大  
 樹の高きよあるハ。雲を呼ぶ籠り似たり。物として志が  
 のちきハなく。ハッとしてこよくきいあき。中<sup>ちゆう</sup>一段目よ玉ふ

茅屋治りの庵一。田舎をうつす其立前いと重旨  
と身ゆるふり。今しも主従休める。此の庵の事  
ニぞある。貞佐殿に打あかひ。満佐様今平佐が申  
す事。ヨック通りなきあぞばせ。あふため申す事でも  
なく。父君秋信様は。清当家より。和歌山候へ  
清養子。清出あひしい。実子としやゆせよ。あるされ  
ど。秋信様清当家の清世つぎふれ。他家へ  
は清出がたきも。ちと故ありて。其かわり。清子の清  
産あるとき。田中君姫君の差別なく。清当家の清  
世つぎと。事一のきまり。三年後。清出生あり  
しい。別ち清前。其の一年の後。清産も清出も  
あされしい。彼の蝶丸君。清入候。清当家へ。清  
産の間もなく。ひき取申し。今年まで。清産は

もなく。置玉ふ。父君の清心よて。清入の清  
内よて。か。こき方を。和歌山家と。清内決のよし  
受玉りしが。ちそだて申した。よく目あり。蝶丸  
君よりすぐれ玉ふと。見受し故。今此所  
をばさし。申す。大事。余の儀も候はず。和歌  
山家。及臣はびこり。ち家たをせんたくをせ  
中。今ま清前ののりこと玉へ。烟もあせて必ず  
も申前。清けがのあひ。判然。されば彼の事。た  
ぬ世も恨そ鴨の足。かくて。その清も瀬もあれ  
此の心よて。ましませよ。その後。ま事をはかり。  
清も瀬もあひ玉へ。あへず。事。ね。ずと  
ちと目顔で知らず。おねの内。さすがの満れ。心を得  
玉ひ。自身もあふ。あそちの意見。仇ふ。か思

ひまごさるかの鳥のさへずれば人よありかなくしふる  
 道理ノヲ乎依。如何にも情意の如く。謹み玉へ  
 くアコリやもをも。日暮いざ帰る所は我が  
 玉ふよつれられ。満丸君さ上り玉ふ。しらの本影  
 いさいちをきりし一人の。いえをもつず見合す顔  
 と顔。しふぬふりしてしづくと。やかたをさして  
 歸り玉ぬ。

初音の巻 其二 夜

首春れ行く程に春雨。軒の下の二ツツ。窓打小笠  
 其の外にちとあき此れ幸ひ。人よさとふれ細れじと  
 ぬき足おして一人の若男様下つたひて。いえのへやの  
 外よりかごをとい白歯娘のこ。いえおときは日のつか  
 れちやすめんと衣裳をたこ。いざ床に居ると

あせる其のせりから枕の下に敷鳥のかきつけあ  
 りし丹尺の尻尾をいぶかしげに取上見れば  
 へうれてさぬ細かむの流かぶくむ人ぞあまご心  
 ちし手せきとごとよかきあれば不思議にたえず打  
 かへし。ていよむをりわら。細首かぬよをよと  
 障子をあけ入りくる音子ふりむききて。きりくを  
 せのしつ。ちどろくち余じや。其の初はつの言葉を  
 此れ音木をいしつためよわび。来たのじやと  
 云ぬ玉ふをかきつ。打ぶがめ。てもよだち  
 ちちくをわしてかふる事。ちと半分ゆわせず。  
 さてく。かきもありあんと思へど来たる糸が  
 心すすしてくれと子供。いませたしぐさのふよめ  
 きてむり。ぬき。いざふ玉ふ。胸に一物明有。



の頃よ思ひぞ又えの廊下ッ々して歸り玉ぬ

初音の巻 其之三 二

満丸君唯一人物思ひくおへやよをわすれりか  
此処へ一人のこゝえ。嘗の餅を持来り。花籠の  
そをじいちをそておき。あたり人の居ぬを幸ひいと  
ちよめきてぞ見へけるが満丸君坐をちきし。前かき  
たせて。云み玉ふよ。つらう音木すぎはし雨の其  
夜よ。きこがよしくも云よりて。そちとちぎりぢ  
結ぶしも。そちの残れきよとか思ふ。意よ上下の隔ふ  
きせの諺の其、如く。余はそちをイトナツカシク思ふ  
ふるよ。そちの妙。がよ思ふやうく。云きかせへと  
のねもを。音木にきてるうめしげよ。つらのちん  
と。身よし。て。ありがたく存じます。

ちあさせ糸りて。ちあさせふい。わたくしとして  
いとかわいく。じよ二ツの流坐りませぬと。云は  
て。満丸君。シカト。左様か。そか。余があるた  
めて願をきいてくれざるか。それ如何よをちる  
席たのとかわ身よか。おは。おは。と。を。そ  
れでよい外。て。よ。さい。八木源の巫。嫁入りて。ハ  
れまいか。ちんとちのしやる。それ。その。数。ま。ハ  
目。ま。4万。そちが。心。よ。サ。格。る。ま。で。事。長。く。と。も。物  
話。も。今。ま。和。歌。山。内。家。の。ハ。亂。臣。多。く。や。も  
すれば。父。上。か。糸。や。弟。ま。で。及。ば。す。大。事。イ。ツ。ツ。ヤ  
そちも。き。く。ヤ。サ。イ。ツ。か。そ。ち。こ。か。た。ら。む。と。と。今。日  
ま。で。い。わ。ざ。る。一。大。事。一。目。ま。も。亂。臣。多。き。中。ハ。八。木  
源。之。巫。ハ。誠。の。忠。臣。お。れ。は。く。か。た。二。つ。け。て。せ。ま。こ。

悪人候を打ほろぼさんと思へど几木と心を合  
すつてのちき子心を痛む矢さき八本よりしてそち  
これんぼしし人を以て云ひこせしは此れ糸の  
幸されば何卒八本は嫁入りりて糸が心も傳へ  
よやたのむくいとちきだをうかべたのち玉ふを  
音木のちきだふきあへず。此れほごつらき事の  
候わねど君のちため子たる事いぢまらんよしも  
ちきあふる、ちき満ぬ君ちきさめかねて居玉ふ  
ちり足音高く聞ゆればハット飛のく音木の先づ  
候ぬぐひでのこりをししく一足行きていすし歸  
りて正足とくず折れて立去たるとひきかへま  
入り来る山井平作が午をつかへて杖機嫌を

うかびの終りまゆちひそめ。唯今序廊下ニ  
て音木ニあいましねがまも尾の如しと問かくれば  
満丸君は雲と竹大。兼てそちと謀りし如く宿  
議をきしし彼音木とをどとをちつとくさせね  
るがして八本の如しせしぞ。八本の唯今此れへ  
ちきりませちとゆ子ま程ちく源の五唐は明て  
午をつかへれば山井の先づと引入れて猶をも  
三人は山謀ふしぬ

胡蝶の巻 一 卷二

初音の巻終り

我が物類は飛ぶ蝶の園をちがめて満丸君蝶た君  
に打むかい。如何は和殿春の自長の徒然く  
子彼の蝶の戯る、如くこちえ其を集め内房せ  
て鬼ごつこちし玉づやと子供如く云玉ふを

蝶丸君は伏つ。兄上何をか云玉ふ。是早十六  
子てきわはずやかゝる事。一止め玉へと云ふを  
もきかす。蝶丸君。いんあ。さほど。和殿  
イヤちね。止めため我れ。此れより。樂ま  
と。こ。え。女中。ち呼。つ。と。ひ。度。も。鬼。よ  
ち。う。げ。る。者。小。物。数。玉。と。き。め。け。れ。ば。我。れ  
よ。げ。の。び。て。ほ。を。び。を。得。ん。と。勇。む。ち。り。か。す  
申。老。の。小。卷。の。束。り。て。伏。つ。殿。の。侍。興。何  
率。の。妻。も。の。れ。玉。へ。と。身。じ。た。く。ふ。し。て。打  
ま。じ。り。子。げ。あ。け。り。て。え。さ。わ。ぎ。け。る。満。丸  
君。心。玉。物。あ。る。さ。れ。ば。わ。ざ。と。小。卷。を。追。あ。け  
玉。へ。如。川。ふ。る。故。の。白。は。ぎ。を。よ。め。わ。し。あ。が  
ら。一。回。三。築。山。の。上。よ。よ。げ。の。ぶ。れ。づ。び。て

上る満丸君こわめあめごとと山の下瀬加神社  
の社の裏こしはし隠る、処をバすかさ守捕へし  
満丸君。さあつかまへたぞ。此度、そちの鬼  
さればいざとばかり行さかけ玉ふを。此れ、侍前  
あまりは候。すや社の裏。玉休。候。を。と。所  
を。平。ゆる。し。玉。れ。と。云。へ。は。満。丸。伏。つ。と。か。ら  
バ。ゆる。し。て。や。る。さ。れ。ど。を。ぞ。せ。へ。て。是  
此。の。か。わ。り。く。れ。よ。と。そ。の。本。ね。ま。へ。は。小。卷。に。夫  
れ。さ。つ。す。れ。ど。め。が。知。ら。ず。る。ふ。り。を。あ。し。こ。し  
へ。て。く。れ。と。ち。つ。し。や。る。外。で。も。あ。い。と。ま。じ  
り。よ。り。手。を。バ。し。つ。か。り。よ。ぎ。り。を。玉。へ。は。驚。の。を。顔  
の。そ。の。処。へ。人。の。奉。か。ゝ。る。様。子。あ。れ。ば。ち。り。と。思。し。と  
や。満。丸。君。心。の。こ。し。て。立。去。る。あ。と。小。卷。一。人

打らあすや。長氏殿はたのまねて満丸君の  
様子を見るよ。今日の遊と云ひまへへのれり  
此りや色じかひが多一だと云ふ時よ小影を立  
出る一人のくせ者。小巻様。アコレ

胡蝶の巻 其 二 夜

打興じたる野遊も早や夕暮よありければ満丸  
君を初としてこーえ女中一色々の坐敷にそへ歸  
りけり。満丸君の書齋に一人つくし。本さひ  
もときてちわせしがあたりよ人影見へざれば  
小声よありてア人言。山井。八木等の謀よて我れ  
陪若の者と見せんためわざと小巻よれん暮の体  
小美にかねて悪人のかんたうであれれば此の事  
悪人供へ痛じするちふんさすれが思ふ度よあ

たれば悪人位。白賊。ハハ上イヤ此りや  
重直くあつたわい。三人よつて女しき長司の女  
中たち見ぬる。役者の評書取々ちりかふひけ  
のひよふし。ぎの音よ驚き人々のくやとこころの  
つよけり。ぬしすまりたる女中一かち軒はぎしり  
ぬ言の声。昼夜供よわかましき。虎殿の幸  
とゆふよこをかりかふ一人のくせ者が申老小巻  
のへやの内ぞきこんで居たをりしがそのと  
ちあけひそく声。小巻さま。と云ふよ鼓馬き  
ぬ。やうぬ小美をハねまきの貫の子よ。よ打あ  
れ。くみ曲者。を、小藤太殿かしづかしくとひき  
入れて障子を立切り。右燈よ夜打あぶせてひそ  
く。ばかし。兼て早殿を瑜伽社の内よしのバ

せたまゆるも長女殿へ通じしのためすてまを  
もはあせし如くつまり色ざしかけて陪物よ  
ちし此の屋かたを由し出すらんねん。とせ其  
のこんねんいと聞れて小巻を日よ口。ム、こがつて  
ん山の事しはやく長女様へ。そんなら早く  
のちさいらぶ

胡蝶の巻 其三卷

まままはりつめはまきけし今日し此はま  
今様のちどりのありしと和歌山家より大五枝  
信公のちまもよましして今様のちどりありとて  
序殿をはき清めいと日取よりりつはちりし  
おん各々大尺隠居中侍隠居のちまよは満ち君よ  
蝶々君あはての時ちまよはりけん舞臺よは

よしお朝妻の船わ君たり臣水の流る風せい  
あふれける一人の美女のたをわかのちどり心ぬか  
すある中し満ち君おじよ思ひ玉子よの實に結せ  
の美人ちりとしよ心はやりけれとちまよはて居ま  
ふ其の時ちまよはやちどりも終りければ此れより  
よて酒宴はごまりま客供よ酔たるちりよしとや  
ちどしけし一人おどりの樂屋よまよりちま  
くかひ玉ふかり時よはし朝妻ちまどりし  
ままの唯一人居るはくまよしとそばま  
心のたけなくどき玉ハ彼女も否よあふぬ  
猪舟の水よさえる風せいよとくおはちし  
つきたればし目多しとまんまくの中しよて  
このりの高女結ぶ意よしぞあやしけれ

胡蝶の春

其由

春雨

藤の巻

其由一

去心有心

旭江、水清シト、葉流レテ、海ニハル時、ハ、ふどり  
て、其味カラシ水、ハ、ニブルヲ、啓セセヤ

清

旭江、水。操山の晴風。以テ、葉を、養子、ハ、れり

旭れ、其、行末、ハ、也。知ズ、操風、其、行、処、方

の、方、明。旭、也、を、望、め、バ、水、あり、控、候、ト、シテ

流、~~ア~~、操山、ニ、登、レ、バ、ハ、アリ、の、ト、シテ、行、ク

下、レ、バ、ナシ、望、サ、レ、バ、見、ズ、シ、テ、ハ、見、ル、ト、シ、バ、アリ

ル、コ、時、分、ハ、幾、時、ハ、風、ニ、アラズ、~~也~~、先

時、水、風、無、~~也~~、其、由、キ、ト、シ、テ、今、年

水、風、ハ、志、オ、ル、ハ、風、ニ、アラズ、~~也~~、カ、エ、リ、見、ル、ト、シ、テ、~~也~~

水隠高者依目次

水篋亭著作目次

紀行文部

○氣道中

前編

○五川紀行

全

○寸膝栗毛

全

○易山景野志留紙

卷一

兩總奇稿

全

房總紀行膝の東

ふらふら

——  
龜山之紀行

一回

——  
穴中旅行

一回

——  
稻荷旅行

一回

——  
隨行隨誌

一行

時代文部

怪談明夜の辺風 全

極々秘談池の浮鴨

○如雷也物語 一卷

書乞鹿野山景色

○正邪對照日本鏡 一卷

怪談古井の月影

一青年水掛傳 一巻

新編幻日記

猫又於谷の草紙

太平野記瓊瓊傳

由緑色花の二房 一章

兒寫海忠義の礎

鉄ヶ森骸骨新話 三章

実説蕪草紙

狹谷見立八景傳

猫塚物語

今世文部

筆談梅の紋 一回

屏香乳書生氣質

○田舎の月 六回

秋色大和錦

一春説百景色 七章

雲々実記

一田舎情史 六章

新編松の花

梅の春 一回

水蔭居士妻物語

柳傳秘録 上巻

梅櫻両真鏡

鹿野山土産 全

世情旅夕文

夏課日叢 一回

日本清合戰場驛

新編緑の松

二世嘯も虎

一章



迴燈籠撮傳 一三号

漫筆之部

梨園雜記 一部

田舎漫重誌

東京遊案内

当狂歌留多 全

鋒筆物狂戲草紙

雜誌之部

笑英新誌 六号

繪入半陽新誌 二号

繪入每週雜誌 一

富士新報

錦結新誌 五号

古井雜誌

錦結余誌

閑者新誌 一

時諱新誌 一

繙譯之部

空前絶後海陸奇談 一章

新譯筆の月

正本文部

白波奇聞傳高松

為塚若木の仇討

此本既彼者山崎  
馬鹿之盛哀記ト改ム 全

手漫録

戲作家必携地理小誌

歌舞伎風呂

一筆樂書 一〇

筆硯視私記者苦

かりがね

櫻奇舎主人

二回

名詮自稱と云ふ物の可笑イので、雁の羽音を追手と思ふて逃ゲ出たに敗軍の將い、名を是森平吉と云ツて、想像通り染物屋の職人だ。内ハ本郷の元富士町邊子あツて、妻子共子六人暮志だが、イクラ臭ツ黒子ホツて智慧と一所子系カセを志ぼツて見て、思ふ壺子ハ中々落ホイ、あつとへの染物と<sup>伴</sup>ヒアガルと云ふ口のあきやう子、おれでいさふぬと奥方のお里殿が、<sup>ヤ</sup>屋体店のすし屋を出して、かいがい志ゆるかせいださうだが、おれで其急をすくふ事、出まふかつた。それは又何が故子、さればヨと氣取る程の事でおさいが、可笑志や四人の子供達が、屋体店へちよせて

賣物のすしへ手をつけることゑふ事、これが其内の一分  
 子ださうだ。サ、それを見極めわけで、元来子供達  
 への夕飯のあてがいが少いかう、親の物で盗み氣よ  
 かります、おんぼ子で志かりなくかります、店先で  
 子が泣く、客の買ふ氣よはふりません。加へて其一元  
 素との云ふべきは、真ッ黒な手で手傳をする平吉の信  
 節で。其信切が無ふッたとい知ぬが佛性の平吉の  
 鬼子追れて心を鬼、とんだ事をやりかけた物だ。

花の杖

水蔭亭主人 稿

木	車	岡	都	第壹章	古城趾
の	の	、	を		
根	鐵	長	離		
子	路	く	る		
對	、	續	、		
す	真	く	二		
。	直	限	三		
西	子	れ	里		
の	通	た	の		
方	り	る	田		
ハ	て	其	舎		
一	、	下	子		
叢	電	を	、		
の	信	、	小		
サ	の	凜	高		
教	線	れ	き		

へだ ほそ 隔ちて、  
ほそ 細き おふがれ 小流 をほり 終を止め、  
はし 之 たまり 渡せる一ツの橋 あふすと 子て、  
つふ 村 はたけ 里との便 を 繫 み げり。 な 南 ま 次 だ 弟 い 子 は 島 は と は ありて、  
とほ 遠く、 そのさかみ 其 わか 塚 きた を みづた 分 ふ け ふ だ ふ ず。 ふ 北 ふ の ふ 水 ふ 田 ふ 子 ふ 焚 ふ 。

將 ま の ま 據 ま 所 ま と ま ありて、 ま 夫 ま 夫 ま の ま 枕 ま と ま の ま ぶ。

元 もと 是 これ 戦 いく 國 た の た 世 よ 子 よ ありて、 い 樂 た 度 た の た 武 ぶ。

ち ゆ 讓 ず りて、 な 自 ら 一 つ の か 構 ま を あ せ り。

遠 と く、 そのさかみ 其 わか 塚 きた を みづた 分 ふ け ふ だ ふ ず。 ふ 北 ふ の ふ 水 ふ 田 ふ 子 ふ 焚 ふ。

ち つ 繫 み げり。 な 南 ま 次 だ 弟 い 子 は 島 は と は ありて、

子 は 渡 は せる一 つ の は 橋 あ 子 は て、 あ 村 は 里 は と は の た 便 ま。

を は 隔 は ちて、 ほ 細 そ き お 小 ふ 流 が 終 を 止 め、 は 之 た。

り か っ よ ぶ ほ 人 そ が、 い 今 ま 一 さ 只 と 里 び 人 と の、 た 薪 き 木 ぎ 取 と。

り か 子 よ 通 ほ ぶ そ 細 そ 路 の、 あ 三 と ず の じ の 四 の ず の じ の 迹 を 遺 の。

ち あ て、 そ 其 の 他 の、 ゆ 若 か き す 杉 ぎ の お 木 だ 立 ち、 く 栗 り、 ま 榎 き。

或 あ ち す 榎 い ぶ す ぞ の、 そ 其 の 根 を 隈 を 筈 子 隠 志。

っ い、 い と お 子 な び ひ 繫 れ り。

實 お 子 は 一 お 場 の 夢 の 跡 の、 あ 昔 を 忍 ぶ 物 の。

と い ち い へ い ば、 は 林 の 中 の 観 音 堂 の。

僅 <small>わづ</small>	銳 <small>すゑど</small>	影 <small>かげ</small>	今 <small>いま</small>	影 <small>かげ</small>	大 <small>おほ</small>	東 <small>あづま</small>	う <small>う</small>
か	く	ハ	ま	の	方 <small>かた</small>	手 <small>て</small>	う <small>う</small>
か	光 <small>ひかり</small>	冬 <small>ふゆ</small>	東 <small>とう</small>	写 <small>うつ</small>	子 <small>こ</small>	子 <small>こ</small>	遺 <small>のこ</small>
子	を	枯 <small>かれ</small>	天 <small>てん</small>	る	埋 <small>うめ</small>	る	井 <small>い</small>
染 <small>そめ</small>	放 <small>はな</small>	子 <small>こ</small>	子 <small>こ</small>	と	れ	井 <small>い</small>	戸 <small>ど</small>
た	ち	掃 <small>はき</small>	昇 <small>のぼ</small>	云 <small>い</small>	て	の	こ
る	そ	ひ	り	ふ	あ	こ	子
、	む	た	た	水 <small>みづ</small>	れば	こ	て
残 <small>のこ</small>	れば	る	る	ハ	蛙 <small>かへる</small>	こ	、
の	ゆ	枝 <small>えだ</small>	、	あ	が	こ	ホ
雪 <small>ゆき</small>	け	の	初 <small>はつ</small>	ふ	見 <small>み</small>	れ	サ
ハ	ふ	こ	春 <small>はる</small>	じ	る	サ	へ
今 <small>いま</small>	と	堂 <small>どう</small>	の	。	月 <small>つき</small>	へ	
日 <small>ひ</small>	と	の	屋 <small>や</small>		の		
解 <small>と</small>	と	屋 <small>や</small>	根 <small>ね</small>				
け		を	を				

砲 <small>ほう</small>	爆 <small>ばく</small>	ま	鯨 <small>くじら</small>	鳥 <small>とり</small>	を	て	て
聲 <small>せい</small>	然 <small>ぜん</small>	遅 <small>おそ</small>	波 <small>なみ</small>	の	洩 <small>はな</small>	、	過 <small>あや</small>
の	。	れ	の	羽 <small>はね</small>	す	高 <small>たか</small>	高 <small>たか</small>
名 <small>な</small>		て	聲 <small>こゑ</small>	音 <small>ね</small>	。	く	重 <small>かさ</small>
残 <small>のこ</small>		車 <small>くるま</small>	の	静 <small>しず</small>	音 <small>ね</small>	重 <small>かさ</small>	リ
ハ		く	、	け	と	だ	る
、		砲 <small>ほう</small>	岡 <small>おか</small>	き	云 <small>い</small>	、	落 <small>おち</small>
空 <small>そら</small>		聲 <small>せい</small>	一 <small>ひと</small>	時 <small>とき</small>	ふ	落 <small>おち</small>	葉 <small>は</small>
を		、	面 <small>めん</small>	を	は	の	の
飛 <small>と</small>		返 <small>かへ</small>	子 <small>こ</small>	夕 <small>ゆふ</small>	之 <small>これ</small>	こ	中 <small>なか</small>
飛 <small>と</small>		響 <small>ひび</small>	響 <small>ひび</small>	、	の	子	子
び		を	き	俄 <small>はな</small>	こ	て	、
行 <small>ゆ</small>		起 <small>おこ</small>	渡 <small>わた</small>	子 <small>こ</small>	起 <small>おこ</small>	、	小 <small>こ</small>
く		ま	る	起 <small>おこ</small>	る		雲 <small>くも</small>
鳥 <small>とり</small>		て	、	る			
の		音 <small>ね</small>	少 <small>すく</small>				
叫 <small>こゑ</small>							

ととき ゆくへ けの くの ざる 罎子 譲

りて、次第子薄く時えのあれ、細

路を暮地子走り来る、身軽出装の若

者五六。あへぎ辰かはす詞子

氣をつけ行けいよ

無論。氣につけとる

はふれてハ不可んぞ

大丈夫つバイて走つとる

大ちへ逃た子遣いふいふ

相違ふい。おれ此通り血がつたふ

とる

血がウ血が

残念々々。どれ何所子

ッラずろツとつたふとる。ホクホ

夕………

「ふんだ血ぶやア、ふい、能く見玉へ」

梅の蕾が落花狼籍

「さうか、おれい、大笑いだ」

「かけつとると目が眩ついで」

「ふんで、エ、ワ、跡を追ふて、かけ」

ろカケロ

林の中子話を運びて、泣せははや見へ

ずぶりぬ。

おれも亦其内の人か。杉の木立の中

を潜りて、又あはれたる男一人

おれはスコツチ地の獵洋服、肩子

一挺の鳥銃を懸て、急ぎ足子歩ミ出

おが、観音堂の前子て止り、榎側の

ちりうちけり  
塵打掃いて、いそがは志く腰掛つ、  
ちりうちけり おしかけ

ホミあぐる太息を、  
ふといき かる やすま

ひ居たり。  
ぬ あをよ とま さる

あふためて此男を見れば、年の頃二  
まゆげ さほどま い

十三四。眉毛ハ左程濃志と云ふ子あ  
り いち と ちとよ

ふねど、凜々志く位置を取りて男ふ  
せつ まぶた あいきやう

志く、それ子接する目甚ハ、愛嬌の  
あいきやう

ある二皮ふれど、何と志く鋭く見へ  
ふたかは あん するど み

て、油断の志く、  
ゆ だん まぶた はいち はふすじ たか

く通りて、志るり勝ふる口元ハ、少  
とほ かち くちめと すま

し小形子見ゆれど、唇の薄紅子志  
まがた み くちびる うすくねあま

て、顔の色かほの白しろき子對ついしたれば、熱心  
あまご

い出る笑いっ穴えくぼ注かへより、却かへつて可愛かわゆく見受みうけ  
あまふやく

たり。又また房ふさ々やくとせとうはつる頭い髪まハ、今いままで



帽子ぼうし子こてを壓おさえつけたりかまけんかた、  
 釜形かまがたの  
 迹あとをの遺のこまてをあれど、  
 額ひたいの上うわ部べのを之これを  
 避さはそのひと、其人かまの冠かぶ方かたよりひき引ひて、  
 其性そのせい  
 質ちまでを思おもひあ合あす。  
 体かみのか寧まろや瘠せたる方かた  
 質ちまでを思おもひあ合あす。  
 体かみのか寧まろや瘠せたる方かた  
 小れど、  
 大おほいすたかふりいと高たかくいまいて、  
 洋やう  
 服ふくの姿すがた、  
 着心きまよまきは、  
 身分みぶんと云いふ思おもひ  
 の種たねふりうのうまうづう概がいしてへ評へうすられば、  
 稟らう

梅うめの香かほ、  
 重扇おもてあしの意氣いき風子かぜ伴ともひたる  
 いやみのふき好男子こうざんし。  
 さてゆ此この若者わかもの、  
 漸やく太息といきのをすます  
 りをあろ、  
 手てをあふまでつ、  
 何處どこへ落おちあり、  
 夢中むちゆうでかけつ  
 詞ことばハ一寸途ちよととぎれかたり。  
 暫しばしばくありて  
 右手みぎて

さ 志のばし、又<sup>また</sup>の頭<sup>あたま</sup>をかぶると同時<sup>どうじ</sup>

大<sup>だい</sup>切<sup>き</sup>ふ。の<sup>の</sup>だか、木<sup>き</sup>切<sup>き</sup>束<sup>たば</sup>の<sup>の</sup>たか

ふふ、ふくちや、……、……、……、……、……、……

さ、さ、と云<sup>い</sup>ふ一句<sup>く</sup>。靴<sup>くつ</sup>先<sup>ま</sup>づ土<sup>つち</sup>を踏<sup>ふ</sup>む

進<sup>すす</sup>めとの号<sup>ごう</sup>令<sup>れい</sup>ふんめり。一段<sup>ざん</sup>繁<sup>はん</sup>る隈<sup>くま</sup>

今<sup>いま</sup>立<sup>た</sup>ちたる若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>の正<sup>せい</sup>面<sup>めん</sup>、一<sup>いち</sup>段<sup>だん</sup>繁<sup>はん</sup>る隈<sup>くま</sup>

笹<sup>ささ</sup>の舞<sup>ま</sup>いより、忽<sup>たち</sup>然<sup>ぜん</sup>と次<sup>す</sup>女<sup>に</sup>を見<sup>み</sup>する娘<sup>むすめ</sup>。

其<sup>その</sup>娘<sup>むすめ</sup>莞<sup>わん</sup>爾<sup>に</sup>と笑<sup>わら</sup>む、美<sup>うつく</sup>志<sup>し</sup>々<sup>々</sup>。風<sup>かぜ</sup>流<sup>り</sup>ぶ洋<sup>やう</sup>

服<sup>ふく</sup>の綺<sup>き</sup>羅<sup>ら</sup>きふキラ。若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>の目<sup>め</sup>ハたれ

二<sup>ふた</sup>足<sup>あし</sup>進<sup>すす</sup>み出<sup>い</sup>る。總<sup>すべ</sup>て瞬<sup>ま</sup>間<sup>げん</sup>の働<sup>はたら</sup>きふ

足<sup>あし</sup>三<sup>さん</sup>足<sup>あし</sup>進<sup>すす</sup>み出<sup>い</sup>る。總<sup>すべ</sup>て瞬<sup>ま</sup>間<sup>げん</sup>の働<sup>はたら</sup>きふ

れど、男<sup>をとこ</sup>の方<sup>かた</sup>子<sup>こ</sup>五<sup>ご</sup>分<sup>ぶん</sup>のすきま、すか

さず打<sup>うち</sup>たむ娘<sup>むすめ</sup>の袂<sup>えま</sup>矢<sup>や</sup>。此<sup>こゝ</sup>所<sup>ところ</sup>に

「ヤ、竹<sup>たけ</sup>さん、此<sup>こゝ</sup>所<sup>ところ</sup>に

の

心こころづきて打うちかへす

葛つたちゃん………マアびツくふえたツ

。さびえいのよ一人ひとりふの

エ、

とエひ様、全まく草叢くさむらより離はなれ来きたりて

堂どうの椽側えんがは子こ近ちか寄よは、若わか者ものハ更さら子こ塵ちり

ち掃はきひて

「まーまアあ掛かけふふサイさい斯はら様うふふれれアあ僕ぼく」

が主人まゆぢんだかぶ。

「まれれハはババカリかり様さま。」

是これ子こて二人ふたりのの坐ざ定だまる。ま無む言ごんと云い。

ふダレ幕まくハは抜ぬきままて、ますぐ引ひ返かへしのの詞ことば

ハ。

モ | モ | 妾 むすめ | ハ | 人 ひと | 子 こ | 目 め | 子 こ | 遇 あ | ツ

た | の | ハ | 初 はじ | め | て | 。

ど | ろ | 志 こころ | た | の | 一 ひとり | 人 ひと | で | 。

林 はやし | の | 中 なか | を | 潜 くぐ |

無 む | 闇 やみ | 子 こ | く | ツ | つ | イ | て | 。

来 き | た | の | で | ス | の | オ | 。

バ | ツ | て | 潜 くぐ | り | 廻 まは | る | ツ | て | 貴 あふた | 郎 らう | 。

ま | て | 草 くさ | を | 弾 はぶ | き | 。

何 なに | 故 ゆゑ | 迷 まよ | ひ | 人 ひと | だ | の | 。

一 いつ | 所 ところ | で | 居 ゐ | 。

ア | ノ | 初 はじ | め | 鬼 おに | が | 出 で | 。

時 とき | ビ | ツ | く | 。

散 ちり | 々 ぢり | 子 こ | ぶ | ツ | て | 。

むすめ

ひと

め

あ

はじ

ひとり

はやし

なか

くぐ

むやみ

すそ

はう

くさ

き

くぐ

まは

あふた

まよ

き

すそ

つま

かたて

ゆひ

それか  
ひとり  
一人  
ふ  
ツ  
て  
ま  
ッ  
て  
行  
ゆき

方がたよ  
ま  
ッ  
た  
の  
で  
す  
が  
ま  
、  
だ  
と  
思  
おも

ッ  
て  
勇ゆう氣きを  
出ださ  
て  
……

そ  
ま  
で  
勇ゆう氣きが  
出でる  
位くらい  
ま  
ふ  
何な故げ鬼おに

が  
出でた  
時ときに  
驚おどろい  
た  
の  
、  
コ  
レ  
ハ  
可た笑わらひ

それ  
ア  
不ふ意いで  
す  
の  
ヲ  
、  
林はやしの  
中なかへ

は  
い  
ッ  
た  
時ときハ  
心こころが  
又また別べつで  
ま  
た  
か  
ら

、  
それ  
よ  
貴あま郎らよ  
是ぜ非ひお  
目めよ  
か  
、  
ッ

て  
……  
と  
云いふ  
目め的てきが  
あ  
り  
井ますか  
ら

ア  
ハ  
、  
、  
、  
さ  
ら  
向むかひ  
ま  
ふ  
ッ  
て  
ハ  
平へい降こう

だ  
、  
ま  
か  
し  
ア  
ノ  
鬼おにが  
出でた  
時ときハ  
丸まるで

戦せん場ぢやう見みに  
様やうだ  
ッ  
た  
か  
ら  
序お無む理りの  
ま

イ  
の  
サ  
、  
僕ぼくの  
あ  
の  
時とき五ご位らい様さまの  
迹あとよ

居まッて直すぐ一いっ發ぱつ放はふッたたが當あたふふか。

ッたたののんんだだかかふふ勢せ子た子こふふッてて此こ所所、

ままででちちッかかけけたたががどどろろのの息いきがが切きれ

ててああるるけけふふかかッたたかかふふ、此こ堂どうでで休やす

んんでで居またたのの。

ささうう、妻わいい又また此こ方ちうでで話は聲こゑががたたかか

ふふ、急いそいでで此こ所こへへ出でるる、と貴あ郎らががおお

いいででふふささッたたののんんだだがが、どどんんふふ

まま嬉うれままかかッたたででままややろろ。

おお前まへさんさん、嬉うれままかかろろふふがが此こ方ちうハハ残ざん

念ねんだだッたた。全ぜん体たい今こん年ねんハハ鬼おにがが少すくいい。

ささううででままややろろヨよ毎まい年ねんのの倍ばいシしでですす

かかふふ。

全ぜん体たい山やま番ばんがが氣きががききかかふふイいののだだ、く萃わい

族ぞくの慰なぐさだののラ鬼うきをか買かッて来きて放はな

まてなけばよいのよ。

アあラそんお悪わる口くち云いッて。

アあハハ、**ワ**所ところで僕ぼくは是非逢あいた

イとハ何かなニ用ようふの。

エ、用ようがまありなすの。

僕ぼくも用ようッて伯父おぢさんか。

インエ

ぢやア伯母おばさん

インエ

ぢやアお前まへさんだろふ。キガマズ

とどんお用ようふのサ、早くはやおき聴かせ

サイ

其その用ようより先まづ伺うかがいたいのハ……

おせいぼ  
去年暮こぞも……子、  
ケイト  
毛糸けいとの帽子ぼうしハ

おれハ平降へいこう、ツヒ  
いまみち  
今路いまみちで……

どろホサツたの。

実まこと子こ実まこと子こ、申別もうとわけが  
ふいと云いふふしまるがび  
主尾しゅび

ヲホ、何様どろホサツたのでスヨ

り。

ヲヤ後うしろ子見こみへたのハ。アハハハハハハハ

ホれで安心あんしんした、サどろか歸かへえて

……

何をなにでス

後のうしろ物ものヲ

時とき々々山やまの後うしろ子こ、太鼓たいこの音響おとひびき渡わた

る、二人ふたりの話はなしハ是これより急きゆうふり。

オ、太鼓たいこの相圖あいづ。サ、道みちが知れぬ



ア 教へてあげやう。

「ど」やア 帽子。 慥子 渡さるゝたヨ、

今度お落さすツちやア ぎ、なせ

んヨ。

「決」まて落すふんて。 廿一 お出さ

イ。

元の道へ行きかゝる後の方より、年

頃身装の、前の男も同じ着者、一

生懸命子走り来まが、前の男もつぎ

あたりて、飄路々々とあとをやりつ

、初めて氣のつきまが如く。

「ヒ」ヨ——園邊か

娘ハ素早く身をかはまて、木立の中

子海をかくす。

音毛君が何様志のた

目鏡を落<sup>ち</sup>また、第二<sup>だいに</sup>の命<sup>いのち</sup>を。君<sup>きみ</sup>、

つれてい<sup>つ</sup>てくれイ本陣<sup>ほんぢん</sup>まで。

目鏡<sup>めがね</sup>を落<sup>ち</sup>また、それアホな<sup>アホな</sup>ッたろ

一寸<sup>いちせん</sup>先<sup>さき</sup>ハヤミふん

盲滅法<sup>めくふめつぼう</sup>界<sup>かい</sup>は此<sup>こゝ</sup>所<sup>ところ</sup>までハ走<sup>かけ</sup>ッたが

連<sup>つれ</sup>てハ行<sup>ゆ</sup>くが、マ—子<sup>こ</sup>アゆッくり

行<sup>ゆ</sup>ッてエ、でハふイか

ウ<sup>う</sup>ンニヤ急<sup>いそ</sup>がんと兵<sup>へい</sup>糧<sup>りょう</sup>はありつけ

人<sup>ひと</sup>ヲイ

サ<sup>さ</sup>ろ引<sup>ひ</sup>ッばふくッてヨい

ふイか、何<sup>ど</sup>方<sup>ち</sup>が先<sup>さき</sup>道<sup>みち</sup>がハ分<sup>わか</sup>れア

ふイ

ふイ

# 花乃杖

はふ

つえ

一



の	つ	く	心
音	のり	娘	心
ふ	り	ハ	ぶ
き	ま	、	ず
方	雪	霜	引
の	の	柱	れ
ミ	解	の	行
揮	て	閑	く
び	、	る	、
て	濕	道	男
踏	り	よ	の
み	勝	り	迹
め	ぶ	、	よ
り	る	久	り
。	枯	さ	續
	芝	く	

序

…… なるべきことをしりあはら  
 ず 趣向は妙し 行文の美  
 を挙げ以ては 篇の序とあるん  
 抑も 蓋し 此後 大人  
 なるもの事を 目くらすれ  
 ば 是 子 於 此  
 四ノ手短 句を 巻首  
 かしめて 以て 其の 書人を 塞  
 り ありて 序と あり あり  
 若し 夫も 其の 味を 去るを

秋<sup>せ</sup>三<sup>さん</sup>更<sup>せい</sup>於<sup>お</sup>き<sup>き</sup>か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>梅<sup>ばい</sup>め

秋<sup>あき</sup>白<sup>しろ</sup>く

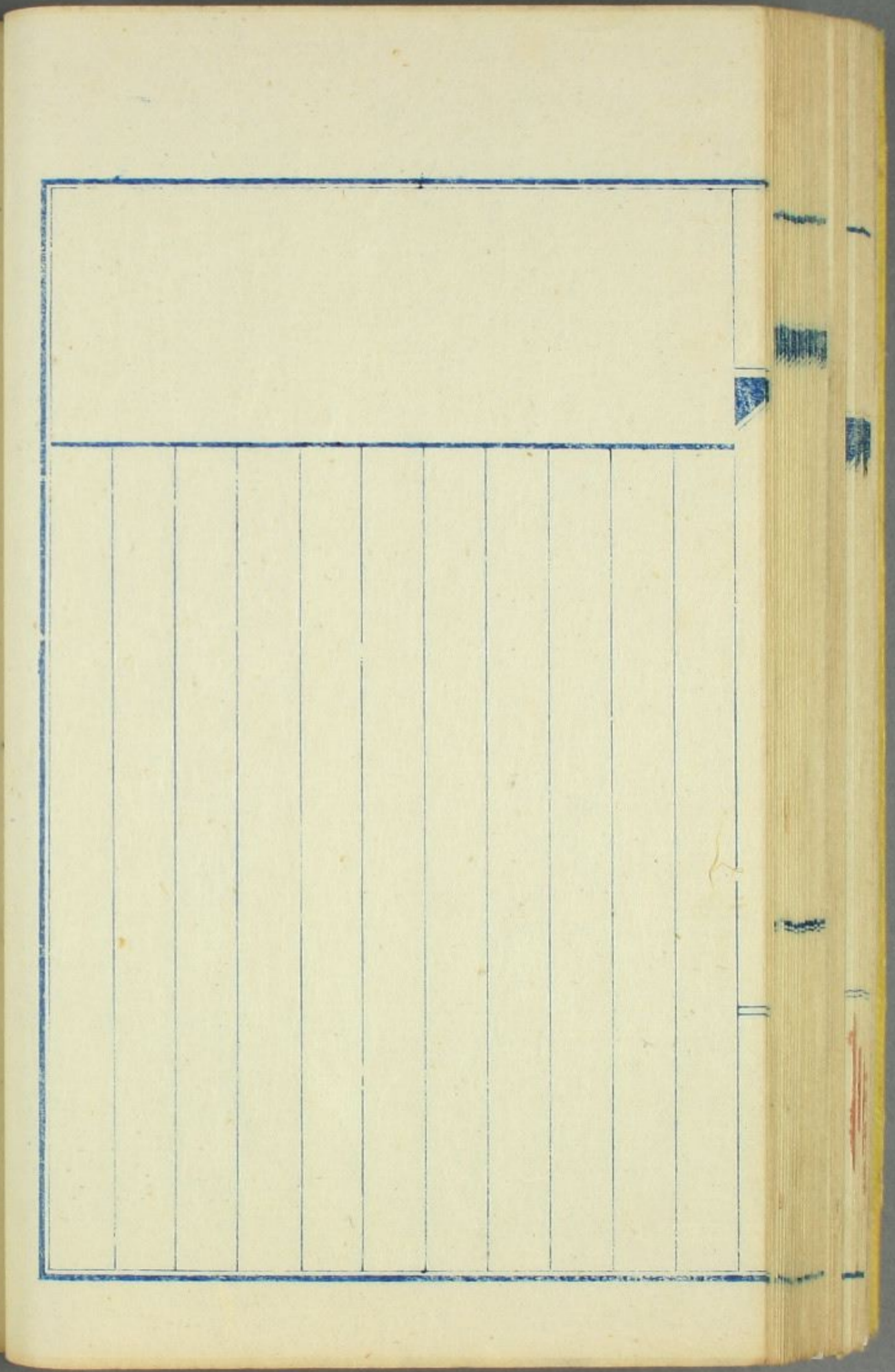
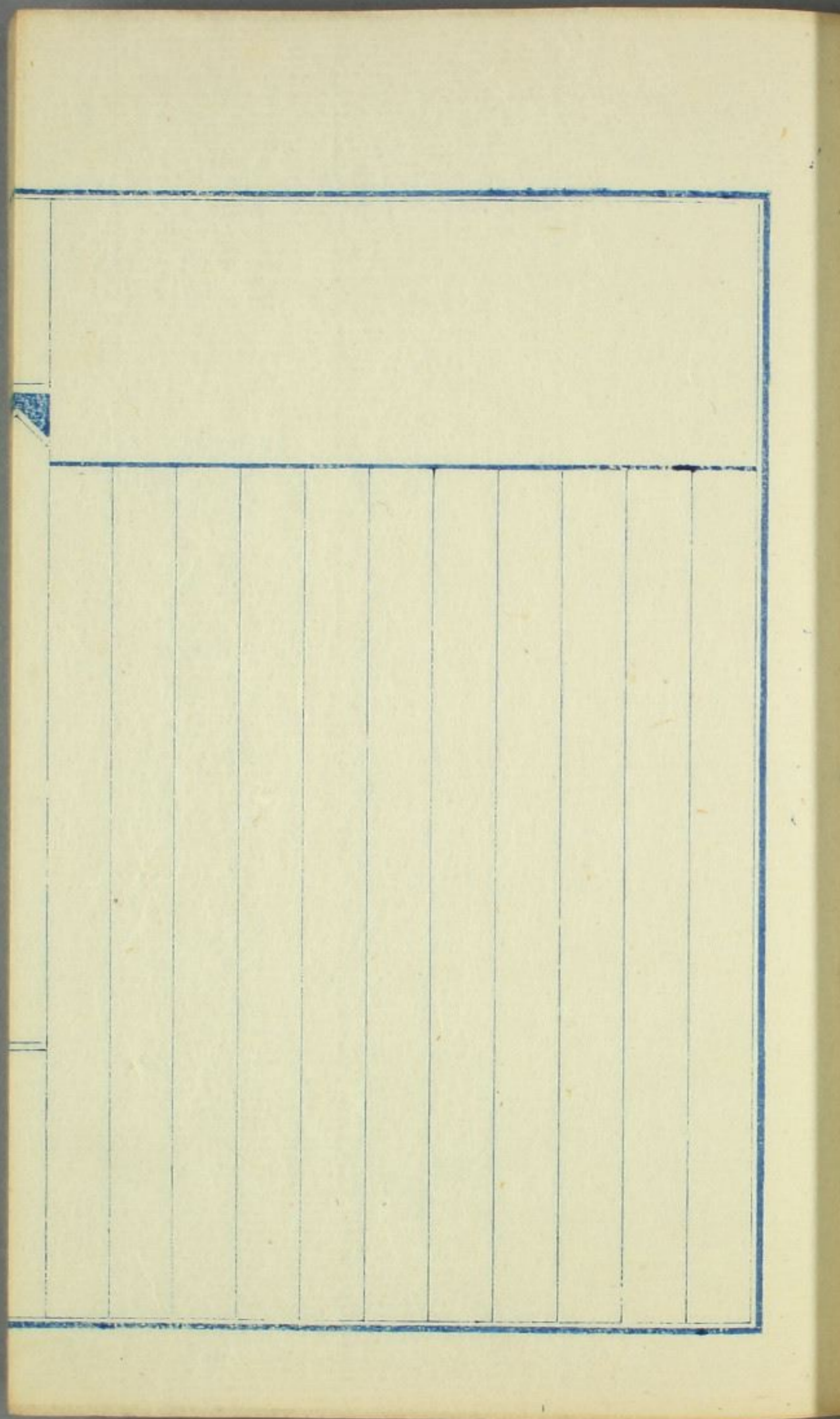
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>す

園<sup>うゑ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>香<sup>か</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>す

花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>す

明<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>子<sup>こ</sup>十<sup>じゅう</sup>二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>

暗<sup>くら</sup>香<sup>か</sup>る<sup>る</sup>疎<sup>そ</sup>梅<sup>ばい</sup>記<sup>き</sup>



花の杖

第二章 古城趾

花の杖と

ちの

の

の

都を離るる三里の田舎、小高き岡、長く  
續き、東の一方は土の壞れて、あやうく限るは  
其下を、汽車の鐵路、真直に通りて、電  
信の線、木の根を對す。西の方、一輩取の女教を  
隔ちて、細き小流を止め、之を渡せる。川の  
橋まで、村里との便を敷きけり。南に次第に皇  
とふりて、遠く、其塚を分たず。北に水田は、簾を

譲りて、自づツの構をなせり。元是戦國の世  
 子ありて、幾度の武將の據所となりて、丈夫  
 の枕とのふりつらんが、今に只里人の、薪木取りよ  
 通ふ細路、三すじ四すじ迹を遺きて、其他に  
 若き杉の木立、栗、榎、或は椎などの、其根を  
 隈笹子隠まつ、いとちまやのよなき聲をり。窸  
 められ一場のさすの跡、昔をみれば物ごとく云へば  
 、林の中へある觀音堂の、裏手へ中へ入る井戸  
 のまき、たれさへ大方に埋れてあれば、蛙が見る  
 月の影の、とよると云ふ水にあぶじ。  
 今さる東天は昇りたる、初春の朝日影ハ、冬

枯子掃ひたる枝の隙あり、鋭く光を放ちそむれ  
 ば、堂上の屋根を僅かよれはたる、残の雪今日解  
 けて、溜高く重りたる、落葉の中へ雪を洩す。  
 音と云ふは之のこゝまで、小鳥の羽音静けき時を  
 、俄に起る鯨波の聲耳、岡へる細音を渡り、少  
 を避れて車轉く砲聲、及細音を起る音爆然  
 砲聲の名残、カエを飛び行く鳥の叫。鯨波の  
 行か、戦のくぐる笹子譲りて、次第に薄く  
 時を多あれ、細路を草馬地と走り来る、身輕出  
 袂の若者五人。あへが衣をかはす詞よ。  
 「二葉をつけて行けいよ」



「無事調。三葉につけと。」

「はふれて、不可んぞ」

「大丈夫ついでに走ッとする」

「ホッホッへ逃(逃)だよ逃げイホイホア」

「相違(相違)まゝい。ちれ此(此)通り血がつたふとする」

「血が……ウー——血が……」

「残念(残念)さうさ。どれ何所(何所)よ」

「ソラぞろッとしてふとする。ホッホッダー……」

「あんだ血(血)をヤアまゝい、能く見よへ梅(梅)の甘(甘)雷(雷)

が落花(落花)狼藉(狼藉)

「ヤ、うかすれ、木(木)がたたき

「かけッとする目(目)が散(散)ついで」

「あんでのチロ(チロ)跡(跡)を追(追)って、かけろカケロ」

林(林)の中(中)に話(話)を運(運)びて、次(次)女(女)ははや見(見)へずおぼ。

ちれの赤(赤)其(其)内(内)の人(人)が。杉(杉)の木(木)立(立)の中(中)に替(替)りて、又

もあふはれたる田(田)力(力)人(人)。ちれはヌコッタ地(地)の獵(獵)洋(洋)服(服)

、眉(眉)子(子)一(一)挺(挺)の鳥(鳥)銃(銃)を懸(懸)けて、急(急)心(心)ギ口(口)止(止)まッミ

出(出)るが、觀(觀)音(音)堂(堂)の前(前)まで止(止)り、椽(椽)側(側)の鹿(鹿)打(打)

掃(掃)いて、いそがしく腰(腰)掛(掛)つ、ホッホッあぐる太(太)息(息)を、

軽(軽)くなへて美(美)良(良)の尻(尻)をけり。

あふためて此(此)男(男)を見(見)れば、年(年)の頃(頃)二十三(二十三)四(四)。眉(眉)毛(毛)

、左(左)程(程)油(油)取(取)ちと云(云)ふよあふねど、溜(溜)下(下)をまく位

四直を取りて四方しく、それと接する西の目蓋まぶたは  
可愛嬌めづかしいのある二皮ふたはだけれど、何と云ふ鋭く見えて油  
断きりのき、眼の配置。鼻筋は高く通して、さきより  
膝ひざの口元は、少し小形も見ゆれども、唇の薄紅  
まろで、顔の色の白きは對たいされねば、熱い出る竹たけ  
宛くづ注づより、却て可愛く見受けたり。又房々ふさふさとせる  
頭髮かみは、今でも帽子を厭いとまらうけたりけん、金  
形の赤あかを貴たがまらうけれど、容かたちの上部うへに之を辟はらきは  
其人の忌方よこしまより引ひいて、其性質しやうせうを思おもひ合あはす。体  
に密ひそる瘡かさたる方かたをれど、又またはすりりと高くまて、  
洋服やうふくの姿すがた、着き心こころよきは、身分身分と云ふ思おもひの種かたちは

り。そゞ概おほを評ひやうすれば、真下梅まげの香かほ、重おもしの  
音ね氣きを風かぜの伴ともひたのい、やみのよき、好この男子なんし。  
さてこのサセ者させものは、漸しだく太息たいしのそよ、よりさう、  
左手ひだりてを頭かぶをもどりく。袖そでのほろり、軽くゆぐ  
「向むかふ方かたへは、深こほまるく、さきませ  
たか、木坊きぼく……はびさう、強つよく  
詞ことばは、寸途すんどうにたり。靴くつは、右みぎ手てさきの、  
又また靴くつをさき、同時どうじ。  
「大物おほものの、か、さくささ、チャア  
さうだと云ふ、可べし。靴くつは、土つちを踏ふむ。進すすめとの、白しろち  
合あひ、は、り、時とき、

三三〇  
えまうへへ  
三三〇  
思おもひ、  
三三〇  
三三〇  
三三〇



西の巻

中 錦々

2人、きりぎりす、  
分け、社務を後

指、後、  
おののの

は、則ち、  
の若者

この時、  
は、形あるの

水、  
か、お

と、  
お

と、  
お

ふア。

「だって、  
廻る、  
貴郎。迷、

や、  
手、  
指、

弾、  
は、

「何、  
お、  
様、

「居、  
お、

「ア、  
お、  
時、

「お、  
お、  
行、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

「お、  
お、  
お、

かけぬが、どらる息が坊であるけあかしたる  
 此堂で休んで居たので  
 「さう、又（驚き）此方で諸人が来たわいな  
 イで此所へおると、身屋又貴郎がおどま  
 だのぞ、とんちま嬉まかたでまやう。  
 「お前さん、嬉まかろうか此方に残念だった。全  
 体今年、鬼が少イ。  
 「さうでまやうヨシ母のお備シですわう。  
 「全体山番が三系がキツイのだ、華族の忌  
 日のヲ鬼を買って来て放まをけよいの  
 ぢ。

「ア、い、それはず  
 とすも、うとま  
 内子、片手  
 君、おま  
 本、おま  
 本、おま  
 本、おま

「アラそんな悪口ニッて。  
 「ア、い、い、所で僕も是非逢イたいと  
 何か用事。  
 エ、用があります。  
 僕も用って伯父さん。  
 インター  
 「さやア伯母さん。……誰だるふ……ア  
 お前さん。  
 「アホ……ア……そんな所。  
 「ア……そんな所さん。とんちま  
 「イヤ、ふ。……ア……おとづけや

「さういふかえって  
あんなののさうさ  
あが

「ナニをいふかえって  
さういふかえって

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「先子何イタイのはけさ  
毛糸の帽子

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ

「さういふかえって  
あんなののさうさ



が出ました。ア、一寸先ハヤミあん  
君の目鏡ハ何度だ

「五度と七分位イダ、見の遠見の時ハ二ツかけ、  
イと見へん。だからモ一五里ハ務中、ア、  
ちやと君をつまみだす大丈方だ、子君本陣  
まで連れて行くぞくれるぞ」

「連れて行くが、マ一子アゆっくり行くぞイ  
で、イイカ

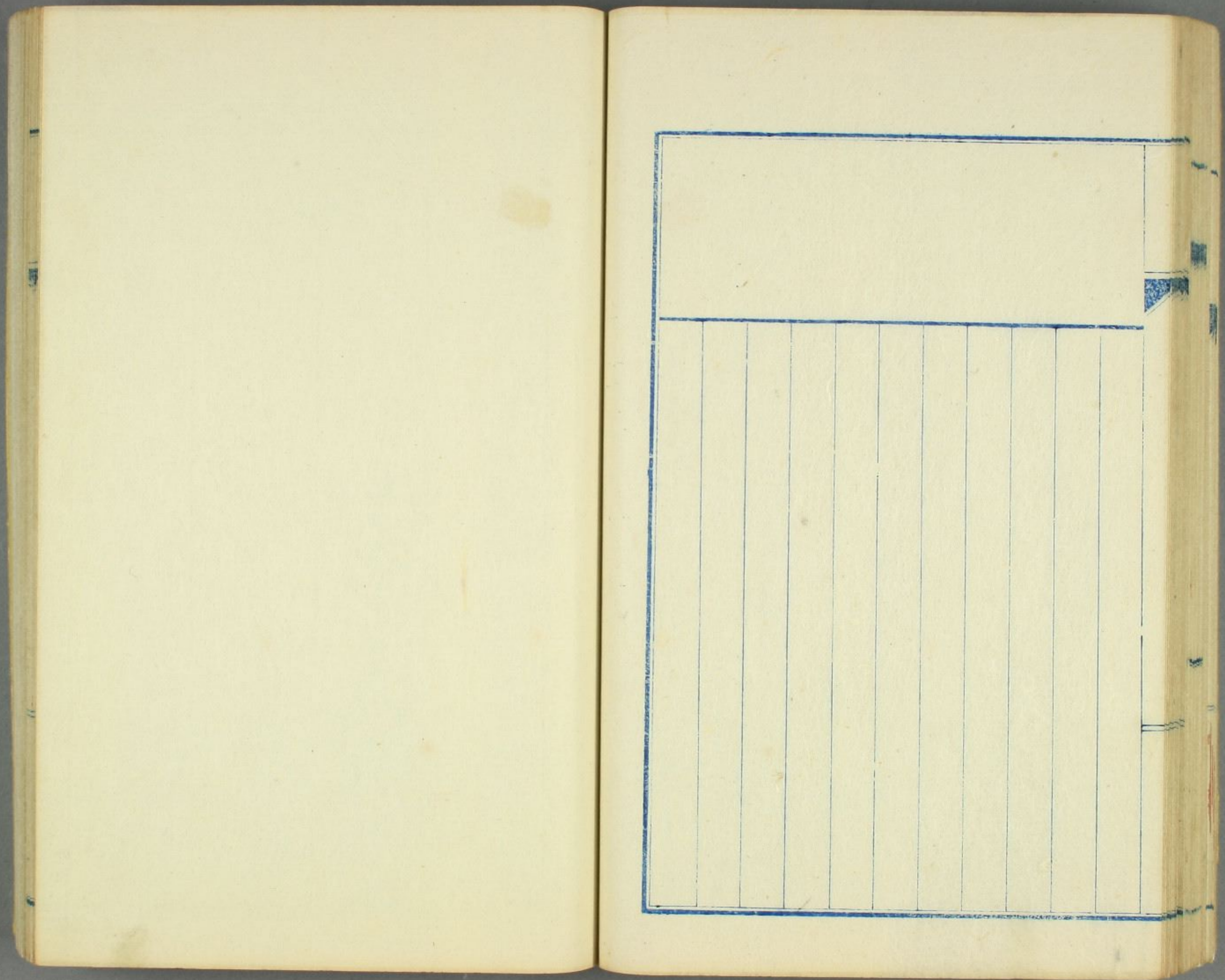
「らニヤ、急ぐんと兵糧ありけんワイ

「さるひばらぶくして、イイで、イイカ、何方が先道す  
たか、イア、イイ

心あざむく引れ行く、男の迹より、續く娘ハ霜

柱の目より道より、久きくつり、雪の解て、  
濕り、膝の枯草の、音も、方々、揮びて、跳び  
めり。





花乃杖

は  
ふ

つ  
え

花乃杖

二



惠美堂



第二章 風流家

清き小川、一文字子流る。躑がば渡る、程の  
廣うあれど、わげと加木たる土橋の根より  
二三歩進まをぬぬ、子新あたらなる衡門かえりの西北  
子向むかひて立たり。されをまじまを西にし方かた子分われたる  
竹垣たけがきハ、ちばし流ながるる伴ともひたれど、イッいと五ご六ろく間  
の内うちを止とり、次つぎを隣とな家の杉垣すぎがき子護まもりて、  
向むかひの方かたへ曲まり行く。門かどの中うち子平ひら空あ家や生なまの

一棟、いとほね廣く、あふれど、風雅をたぐ、技目の  
まき、建建つ、新新築とてふつたり、見へ  
より、中々住居なる、人のいぞめたるも  
さて又此所の裏庭に、仕仕園あり、泉水あり  
泉水の上、こひわけの、結結山あり、お  
あつへの青芝、つらみ松、石を自然自然の詞の  
載せたり。其榊の終る下まで、由り次次女をか  
く、竹垣の行方、此此所こそ、底底きか  
はり、忍忍返しを上り、載載く。されど泉水の水の  
ま、全く小川の名残、裏裏の水田より、落落  
来る物よあれば、澄澄渡る程に、あふれど

、静静く、動動く事なく、只只浮出たる蓮の新芽  
子、糸糸羽を休む、蜻蜻蛉の水、吸吸ふ尾子の  
連立てり。ゆへか、山山よりあふる、園園の春草、子子  
すの風の、動動き、底底の小、新新の消る空  
か、空空の蝶の散る、底底かと、一一度、くく  
常々、慣慣て、目目立ぬ庭の、慣慣たる目よ、そそかく  
入りて、又他人より、田田まじりたる、絶絶す、其其  
内もあふれ。

花園より踏石五ッばのり隔りたる、一間の内  
み、  
「サ—、あちちへお出なさいまし。そちち



「どこの中庭。竹一が仕が好んでスカ  
くたふふイ物でも植てをきまうので。……サ、  
それをあおみふさして、中庭。椽側で馬坐  
するわ。只今あちをのぞきけすが、  
さうい、日あかりに、よろこぶ馬坐をきまうので  
縫物。ま、い、この所まで致しまさうの  
三人、入り亂れの挨拶。車り合ふ内、壁をきり。  
飲む茶、吸ふ煙草は少しの猶豫も、心も畫  
く會話の下組。さう出まわあがりをも容の方  
より。」

「さか表、よく十んちよお午が届きます

ふア馬大休で、馬坐をきま

受たり一針。めま、出す話のまじり。それあり

い、續きとくる。

「イエ、も、一、向構ひ、致をきまので

すがあはアス、が馬天のよろこイ時、  
も馬持するもので、それで此通、馬坐をきま

まのし何を由、さうい、馬坐をきま

で馬坐をきま、さうい、馬坐をきま

と申、さうい、馬坐をきま

ツ、さうい、馬坐をきま

ツ、さうい、馬坐をきま

か、け、ま、さ、う、い、

ではお伊子さま。それよ竹よお千傳申せと  
云ひまをこゝろふか。ナカ。お教はあやうなア坊お伊  
子のせんヲホ、……

「イヤ、お千お供の一向申ホと、まき、  
そのせんでナニまのいもス

「おそれでも女の坊子様いふんで坊お伊  
子のあつらひ……さかしまアお勝さんのおは  
きゆうちあんあすッたのよ。お勝さんまをた余  
中でお目まか、ッたるど〜とささ〜  
おぞびく、坊お伊さません。いふと申おいよ  
くまア此内がおわりのよさしよまをた子イ

「ハイ、オウあふ。鳥度十年ぶりで坊お伊  
子のあつらひ。新橋へつきよ来た時、  
おで勝手が置イイ子さま  
おる

「左様で坊お伊さま、あふたが用執の  
一カへ坊出立おさッてわら……はや十年おまじまか子イ  
子おとよ早イ様で、それで又あるおへ出  
てまかりとモットたッた様と思われませ  
お勝さんよおかかれ申あはのが、エーとお  
いくつの時では坊お伊さまをたか子イ

風の向よよッてお宙のよはひ  
セツの時では坊お伊さまをたか





おのれ  
女房で七三三を  
のり  
これ  
おのれ  
おのれ  
おのれ  
おのれ  
おのれ

下女子

「あのお世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ  
それで…早く…お世の物を…  
心得て行く下女を送りて。」

「田舎口では待てますが、情ゆくりとは田舎  
おさいませ、久えぶりで方々情見物をやして

……それでお世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ  
お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ

「夫に其お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ  
情見物と申しお世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ

半お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ

「あのお世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ  
イヤス

「アッお世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ  
お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ

と云ふ時をもち返りてお世何人上げてをいしかエヤラ  
お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ

「口今お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ  
お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ

お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ  
お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ

「お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ  
お世何物…お世何人上げてをいしかエヤラ

伯父さん所で長ふちって

とまゝくより静耳をかけた、椽側の客も躊躇する。

「お飽やしちゃいませ……あのおやまさん、これ、料亭のおゆかさんとお膝かすんで

ホ——おゆかさんか、マ——年を取りやすと……

孫の牛を離れてズカくと進めば、のびた竹のままりわらばは、

おばあさん……をあげぶぶは、おやまさん

# 市市山輝夜 花の杖



澳村の柳

水蔭真主人

## 第三章

(椿の中の小家)

遠州灘の名残の浪は此所も砕くる志麻子棄の傍。  
鉄色の岩穴大立つほとり、深緑と直白とをり、と直白と  
見れば元の深緑とかへる其はやさ。時は高き山の上よ  
りかむりて、休ふ身の驚く事あり。落る時瀧と見え  
へ、根え打つ時、霧とふつと教るのさだ。  
それを口二目も見え降す岩頭の平を、此十九里内子  
べる船の水去が眼は皆之よあるの燈臺あり。今ま  
のぼれる朝日まゆなり、燈の光はあけられ、空のガラスと  
ペンキ塗しの木生しきは、キラ〜と輝きて、潮を照る。

の松の亂れ勝よりつよく見ゆ。

之等の影とあり一段低き処、かやぶきの粗末ある家二軒。

椿の繁きを其子、子垣とふし、入口とて別よきけれど、ちよの

ある正月の四明繩は、三木の余地をあひなき垣の間をつふ

びてあり。庭よりは亂れたる花園、されど青草のこゝ花

はまし、中程は大きき魚籠、破れたる網を掛あり。かゝる。

之より向ふ障子四枚の縁側には、むさろの上より干す草子

魚のうがず。破れより散るはちりはさまあつて、

之よりあつての繩は破れより入り、内よりは世話さげよ織

る襦の音、まくり車の音、絶間をはり、

く、馬は、椿の花の流をたき、家の四のまをま

ける。

ちのち、年頃、三三三の音とて若者、見れば脚半は

ゆいといふ旅將え来、肩より女籠をかり、白

毛布をた、其の女其まに抱き、余る片手は階

まの隅にた、家の前を進み入りぬ。定めて的

矢よりの夜舟あがり、立止まりて、亂れては進むは

されど心持よく息を吹きつ、キツ目をつけたるは蔭門

神の札とて、国府新へ表れあり。

されよとじよ合天、進み入る彼の縁側、障子越よをよ

ふへば、車の操の音は止りて

とちよ

と出る田舎口同調、いづれの女のま戸あり

「ア、歌園では壁アイマス  
私は伊勢の松坂沙羅の若く者」

の  
404

「お母さん」 「アハハハ」

と云う、一枚の障子ひらきたるは高様の上は腰かけたるまゝの女。年四十五にやあらば楊のまゝの心でし事

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

外はほどほろい、内は小綺麗に一問の内子通れたる

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」

「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」 「アハハハ」



と云ひつ、皮膚の間にけさるる紙の中より取らるる  
娘と昔よめづらげ子聞き見つ、

「マ― 綺麗麗子出来ども。幸甚ではやかぬが、ふ  
んだがお父さんより上キイよふた子」

娘は本像をうつもたら一枚を取り上げ

「マ― ホッ、ナれちんやろ 奇体お顔まで」

「それですか、それは奈良の興福寺の方物でゴート  
十三金剛神の一ツです。幸甚娘子はそれよりの方がよ  
いでまゝろ」

トサー出でたるは三笠山のと真黒小、春日日の宮とぞぞ

るゝ松影色の密画をれば、ナれはくともうちびて  
見居たる時、障子の聞く響と昔よ、喉自慢

みや葉色を声ないくつとなくゆりまわら

「戀のものがれて、わつちやはおらばのトチン、ンジン

か、ちひろさんは居まふか。マホシ、ナれは大男の

後声、大男とさふのは七偏人もある通人です……」

田舎者は田舎だけの洒落子かおちて、つがくと入り本

まは三十所生まを来た、ひびり油をそそぎてと

中より分けたる教諭の先長く、耳の両脇にたれて尻か

見ゆるを参事郷子のるる如く、あはれあはれあ

とやうで読せばたけり。

十の生きたる男は間に入るやろや授け様身

を横へ何が口をくんと、トト敷格なき容を見え又

巴を見、低子あたまで神をふた

「馬名を来るとは知らずと致さるまふ。エハ—ウマは  
一醉の名残、跡々踵々の足跡をなやまう、うまを致致。  
僕は当、燈台の官夫、阿村次郎で、以後お心  
安ふ。おばば……はれは何君、エ、何処か」  
「寺の塔で歌園芳周と云へる……」  
「——る歌園芳周君」

酔ふふりこそ酔はぬ痴漢。さまが塙のやまを思ひ  
出さるる如く一團へ立ちて、叫びのせめよ外へ向ひ  
「ナ子阿村は此新子居る。エ—今行くよ云ふよ  
つばきつ、出で、行くは子娘と教をさかめなむ  
」女せむ布だと思つて、イッでの……はんとよすあぢい  
田のサ。それ子官夫のやまを。ありや、廿りさん。

西燈籠

其上——何まつひる、思ひ出さ下りて涙。

廣々ゆづり小橋ある一構。一所は東京を重ばかり離れたる白子の  
里の近くあり。一。二構、前は武蔵野の名残ゆめしく、尾花が露  
子月の出や見あふ。入口の門を関するの両脇は、時の物のサ半園並びて、  
見るかゞ口、水た、ゆる西山のニツニツ、甚も隠れあるが中々あり。後には  
着良奥帆の落水、清く澄々渡つて、ちかちか氷ほじつめたる小川、両山は  
青々之繁り、初夏は棠、才垣は中の音の籠を響く。それを越えて向  
一園、稻田の畝め得る云はれず、限る正るの青苔の林、寺の塔の屹立せる  
間、素顔の美人——百々の言ひす。  
頃三伏の日中ふれば、照りつく日光の劇——き暑き。それゆへ一構  
は知らず顔、垣と見る四圍の青苔、雨下の雨は風をそへて、はな



鹿を止めり人、蟬の声高くは、謹むを体む。されど夏は夏、  
日中は日中。舞植の朝顔、花の女を、て此糸の色より、サメ、は石  
うづむる日照る千は、時を得顔、子咲き、亂れ、其色の白、赤、黄、  
青、紅の艶を、る女。殊、子、小川より引きたる泉水の、うごく、秋、海  
の、木、子、を、羽、かけ、たる、かげろふの影、を、亂れ、ず、宿の奥、穴、エ、子、舞、舞、ふ  
心、持、ち、お、す、れ。

時、ふ、の、け、後、も、ひ、か、へ、る、椽、側、の、青、簾、静、子、捲、き、あ、げ、て、風、鈴、の  
音、ゆ、り、と、く、当、代、の、情、女、百、々、と、され、と、云、ひ、さ、ふ、ふ、ふ、下、女、下、女、と、云、へ、ど  
さ、さ、ぱ、り、と、を、れ、身、の、装、色、白、く、と、上、り、あ、り、の、す、て、捲、終、る、や、踏、石  
み、庭、下、敷、を、ま、ん、と、そ、ろ、へ、て、声、静、み。

（あれでよろこぶ、ほ坐、い、ま、す、か……）  
（「うー、よ、ろ、こ、ぶ、さ、い、く、あ、せ、つ、が、だ、ん、……、さ、れ、だ、け、の、事、で、風、の、入、り、が  
余、程、違、ふ、よ」）

云、ひ、つ、椽、側、は、出、た、る、は、年、頃、三、十、前、後、色、く、ツ、き、り、と、白、き、女、  
た、わ、れ、何、も、緑、の、黒、髪、又、ぶ、つ、り、坊、の、茶、髪、を、舞、曲、紫、の、ひ、め、子  
根、を、結、び、て、

袖の月影

江見水陰

一章

本は伊神燈の下を潜りて、火花散せしむる者。真情ある  
人、根引されて、本元服の姿ゆめしく。朧夜の新月は、  
は道の出家とも云ふべし。お松、年二十、あれども、且那  
が出張の留守を引受、片書と云ふ書生と下女のお濱、ま  
だ百夜の祝せぬ男の子を抱きて、お歸はいつか。名を伊  
出立の時紙を書きて渡され、男あは荒太郎、女あはば  
何とありとつけよとのお詠子、一段痛めて産落せしがは

若あふや  
作ま  
小川お松

子、あまりの嬉々子荒右郎安産と、床の中より手紙を出せしめ、はや二月前。ホの間の侍状もそは、其子見たまは山々あれど、後目殊の他いそがしく、予が一月は得歸るまじ、寫真ありと送りてあるそ、新橋の丸本へ連て行き、いつ樂日まで出来ませと云ふ、今日は其当日。朝早くよりお濱を遣りたれど、今も歸つて来ぬは予だ出来ぬのか、種板破つたと云ふのであるまじ、如何した事と乳房收めてのぢれ込は、世帯ぢみて又格別。

（序新造様只今……ラー苦イ）

（どうまたのぢねエは人は。で、寫真は出来て居たの

い）

（はやくお目よかけをせよと思つて……ラー苦イ）

（どんあぢへ早くお見せよ。よく笑つて居るかイ）

（さあ如何ですか、受取ますと其まかけまぢりよ  
よ〜見ませんで来た）

（いぢぢねエ落しごもあれど仕様がよいぢやアふいか）  
お家の宝子入れなとて、かくまごはと思ふ程。いそぎで袋より出す一組三枚。一枚づ、取りて眺むぢの噂。

（ヲホ、よく笑つてるね、あの時動いたぢんだか）  
どうだろ〜と思つたか……）

「清賢あそばせ且那様子そっくりですよ」

「妾もは似て居ふいかねエ……」

「左様では坐いますねエお目元の処はあちかでは坐イ

そすがお口元々々お鼻立は且那様ですよ」

本物の荒右郎はそっちのけ、写真の方が大目であり。

「ヲヤ〜、厭ふ、お前の午が写ってるヨ」

「どうもませ〜、後々おだき申して居る〜たのぞ〜」

ヲホ、〜、〜、〜

「でもお前の午あそばせ且那様はお喜びだよ」

「いやでは坐いますよ片新造様」

「だが早くお見せ申したいねエ、あの片萱のさんはい〜」

ツとやるかい」

「ハ〜お出でせや〜〇片萱のさん……」

「あんなねエ立のちふいで……」

片萱と云ふ書生、常は大と嘘々含ふは男か、ニコライの  
天主閣と覗〜く〜べなを〜と云ふ豪家の者、何故か志は

〜とぞぞ。

「あんで用ですか」

「イエ別子用でもふしんですが荒の字を真が出来ました  
か〜」

「さうですか……」

「ラヤ片巻さん、今日はどうかお休んで居るつておっしゃるヨ、あれほど見たいと云つて居るつておっしゃるのよ」

「へい……」

「ラホ、又お寝込んで居るつておっしゃるののでおやう」

「ラホ、さうですよ、お目の処が赤くおつて居ますわ」

「へい……」

「あ、お憚りですが又上書きを頼みます……おれを出張先へ送りますわ」

「へい……ですが、へい書きを……」

「片巻さん顔で洗つてお出なさい」

「さうも奥さん、けい直は送つてもお目です」

「だめですつて……ぢやアお歸りでするのでですか」

「お歸りする様ですか……」

「ア、お出張先が変つたのですか」

「変つたのです、大変です」

「変つたよ、変つたと云ふて来さうな物ですが」

「云ふて来たので、馬井さん……」

「恐ろしく高き聲まで」

(片言のさへ……且那の身も愛りでのあつたのですか)  
鬼をのあざむく片言が、答も得せず其儘其所へ。

二章

杖柱と云ふ詞、カゝるゝぬ証據あり。いつ何時抗れずと  
云ふ事わづらはずや。茲にお松は、頼子思ふ夫を離れ、  
迹も乳呑子を、へての悲嘆。け後の事深くは思はず、  
んで一目け子をお目まけりて、お喜びの顔見たあゝま  
し。せめて写真真ありとは賢いれば、少しは落着く事  
あらふ。あぜ早も写真真な出来やうぞ——むく  
と腹立て写真真が悪ふあり。あぜ早く写真真の事、  
かざりしぞ——思つば我身を、悪ふてあらず。罪の本  
キ子供までを抱きて、今日朝から晴間はあ。書生

は遺骨拾子昨日出發。迹は遺る下女一人。ふぐさめか  
ぬて、それと臺所の烟をむせぶ。床の間は夫の油畫をか  
ざりて、早速の佛壇、  
まぎらうとて  
は買めはか  
それと前兆かとは、女の廻り氣たわいはあし。お所へ  
お松の弟と云ふ、着賣の仙吉。並の日は板の間は腰をす  
ゑて、遠慮勝の正直者、朝河岸を休んで唐綾物を衣はれ  
をあらため、ずか〜と通りその指掛。

（姉さん、とんだ事子ぶったねエ）

（仙ちゃんかへ、よくア来てお呉だ）

（昨夜来よふと思つたがあつ母が泊ったかゝ淋しかねイだ

ろふしそれ子内と明ふれぬイので近所が今来や  
した。だが姉さん、お前がツクリをそ氣を落さちや  
アいけぬエせ、かゝゆゑ時子は人があんな云ふと病  
子さ、はるるんだかゝ我ア別子云はねエが、あゝとろ  
氣丈夫で居ふくつちやアいけぬエせ）  
（アイヨ……氣は造子持てるわゝ心配をそお呉でなイ  
……おつ母さんは子だかい今朝歸りがけよ、ちぎ来  
ると云ひふさつたが……）  
（おつ母か……おつ母は其あんだ、老人はおえねエ泣  
きくだびれて寢て居るア）

《寝て……どツか悪くツてかい》

《ホ、ホアよくたびれだろ……ヨ》

《ホの上おッ母さんで悪くツちやア……》

《……おッ母で悪くホッちやア……で何かイ

且那のお國の方へはいづれ報知せたいのぢろ……》

《すぐ報知せたい伯父さんとか、取あへずお出さる

ツて、すぐ又電報が届くのだのサ》

《伯父さんが……伯父さんが来るツて、まき仕立をつけ

た処でお前はあちろへ引取れるつりまのか》

《引取れるツて、それはお前行くのがあつりまへだアね》

《あつり前だツてエヤアあつり前だが、止せへ何の田

舎は行くやア及ばねエ、聞はあちろまは八釜まの

おふくろがあつて、全体且那が藝者のお前を嫁まを

ツてイのが氣に入らねエツて東京へ出て来るといッて

様さんが居るのぢやアねエか、そんなけふたい知へ行

くまやア及ばねエやホ、今までは我が若かつたかお

前の世話もホツたが、一人前もホツたかろまやア、樂

ま善ツて行ッてあげるか、田舎へ行くのは止せへ。

エ、それはおふくろばかり八釜まのあまだいい、が

親類中が承知さぬイッて……べらぼらめ、よもふせ

へ〜

《それアお前、向ふの事めとる事とおふくろさんのきついの、よく知っては居るが、は子を離す事が出来ぬか、幸やア行ッて見るヨ》

《お前の氣性ぢやアさう云ひあさるだらうが、お水が一月や二月と云ふぢやアあゝ、一生いやな目なすより東宮子居て、<sup>おの</sup>世話も成るのがいやあゝ腕はおぼえのあるお前が師匠で居ると言ふさい》  
《そんな思ッておぼえるのは實にありがたいが、今度是非行ッて見るつもりだから、どうか止めず子

ヤッておくれ》

《そんな思ひこんで居るのぢやア行かぬさいだが、迹で思ひ当る事があるだらうぜ、〇ヲツの夕河岸前にお母とかはッて又ヤッて来るヨ》



三章

眼を閉ればあり〜と見ゆる姿、其お姿がは曲物の中は  
あふふと存、如何に思ひあほ〜、またと、出まらず。  
取纏るゝも纏ふれず、先聴く片道は病中の有様。

（馬病氣の中は……別にお苦も馬坐いませんでま  
か）

（馬井せんが、非常な其力あつたつて……皆宿の者  
が云つて居る。お死あする時は……ぐつと起  
きあつて、荒ち〜と二声ばかりお叫びあつた  
り………）  
ねでお内へ歸つてお出あする様子、あふた

の名をお呼びおさつた事もありましたって……

「あー、それでよろしい、おくとびれで居座イませる  
ゆっくりお休ませ……」

おれまでの張の強さ。曲物受取り、かたむ一問。油畫  
の下におきて、どろつと泣き伏す力のゆるみ。ふとちろ  
の子の隣におきて、生れぬ笑の父や戀つき。ハ聲夫の名  
残か、わすれがたきはつ子あり。可愛や今はあんまり知  
るまじ、生長の後父様はと、いふぬ。ちて泣かす事  
か。世の中子あるとあつゆる、不幸の牛の。せ、おめ  
つくさするはつ子か。それを思へば思ふ程、せめてつ子の

物事の嘘に分ける、頃まで、おせ居ては被下をせぬと  
画像せめては、曲物子さとり、うらみつ、おきつ精神錯

雑。程経るまじ子考官さまよひ、そのあれそのの睦言  
ゆかしく。晴て去婦子ありと喜し。次第くま進三行

けぼ、つまりは矢張今度の悲嘆。身を震はすより他は余  
し。一時事画像を声ありて。

|| 荒太の行末、どうか能き様子較むぞ…… ||

噫、思ひの亂る、つれづれを極めり。氣を取るや  
一植、おしや根元おきて、黒髪ふつり。亂れを清

淨無垢の人。

申すを遅く、弟仙吉が先を立ち、田舎より今着しと云  
 ふ、早稲の伯父の金五兵衛。わけわけの昔形氣、石は  
 重き物、木の葉は軽い物とより他は、智慧は廻らず。湯  
 屋の軽石、水船も浮くを見ても、芭蕉の葉で海を渡るか  
 ら、人々と計算してると云ふ。言語同断の行程ありて、浮世  
 の情も、人の情も、知るはず、知るはず、其身相應の今度の  
 女後、引受けての得意顔。泣き伏すお松を尻目みかけ、  
 驚く仙吉の構ふ事なく、いさりの相談。  
 (初巻のから、人々事事は言ひなく、おんがの……今度  
 の変事で、国では中々の騒ぎぢや。殊にお松は七の事、  
 たった一人の身、死なれたのぢや、ズンと力を落さ

仙吉の心  
 仙吉の心  
 仙吉の心

おツたが……全体は……お刺さんへ引取って、親を  
即ち育ての……お刺さんが、親類中で  
少くともあり、それよ、お刺は、それだけの  
女房だ、一生後家を通すと云ふ次第は行くまいか  
不、あぐく、置骨と荒太郎とは、私が受取って  
泣き伏せるお松、詞の半より話と起き、句切々々子縁  
度、言はんとする、さうへ、さの根もてくひさばり  
あが、終る詞もこれぞと、馬上げたる調子、それぞ  
は、あがねば、雲ひ勝ち  
（これは変な事を伺ひます、私は旦那様の事です）

後令元は賤い商賣を付て居るをねって——  
場ではお坐いせんか……旦那様がお死なされた  
たか、其息子だけ困へ引取られて……其女房は何処  
へありと行け、イエサ、何処へありと行けと云はあな  
かりのお仕向は、どうも旦那様のお扱とも思へな  
せん）  
（イヤ、さう云はれては、話が角立って来る……）  
（何、おちかから角立るわけでは居坐うせんが、  
い詞が居る……）  
（静か……）  
（成程、其当座と云ふ物は気が立って居るわけ、  
後家を立てる、云々、立て見様と思ひます……）



（十）さういふ言ひをするの無恥といふ推利の志いか  
手切と思つて持つてまふ率内、踏用をききて出立と  
志望のさう）

五五早

花見時、竹屋の渡船もさへ酔ふ物。今度初めの船旅、大船  
も無ツた様子、心太夫も持てとるふ、昔かゝ謔くもめ  
く。ゆづの遣い、志守り店の伯父が會計まで、横濱出  
帆の氣船も乗り、神戸をさくぞ立て行く。汐止場まで  
は母親も弟仙吉、片善と下女のお濱、流し者まであり  
たる人を見送る格の大懇嘆。送られる人の亦其氣を、  
生ある内は逢れぬ事と、人目揃はぬ今條の後、ゆきり  
と多義の詞演べられれば、通船の水夫の情をさず、はや  
くくくとせよだてられ。|| 片善もよふ。|| の一言を漸く文  
まで、波と陸とのわけられ。船、船の影とあり。人、人  
の後とありて、全く見えがかりゆくまで、ハンケチ一握ぞ

ありまはさける。

船子入れば、一種異風の皇氣、鼻をつんざき、はやあま  
く目眩さ、足浮び、思はず金五兵衛の肩に絶れば、  
妙顔そそ肩目まける。さてもどうもたれも能き事やと  
ろろくすれば、世間は鬼ばかりはちき物。船問屋の  
着イ者、ケットーか、えまをくすれへくとさすまぬき。

（今日はお客様が澤山あるので、い、場紙が汚れてるよ  
せん、ヤツとけ紙を取りかかると紙で汚れる  
ち弱ひます、ちと狭うは汚れてるが便紙へは  
ふ汚れてるからへへエーお婦人様方は便紙  
が直る汚れてるからととお出まりで汚れてるから）

南世辞と知れど、其お世辞がろろく、いくぶか包こ  
て、彼渡せば、流い顔の金五兵衛、そすく流し。草  
龍の中よりたぐみ枕出し、荒太郎を掻き寝かして、夢  
驚くふと乳ふとをせ。ひくき天井子、旦那の置骨、曲物  
を釣りて、親子三人の浪枕。

か、る程子、やがて甲板の方しそがしく、何処となく音  
響き、流竹由西三聲。今や出帆の時と知れど、出て見る  
顔の氣はあらし、顔子手拭あり、眠るとすれば、荒太郎の  
泣き聲、流竹を即かと思ひ、驚き起きて直る隣に居る  
お婦人。それより同年位の子供を連れ居る、睦まじ  
き子供を抱き合ひ、おがよくとすかもしさぐさむ。

若し且那様も存命その旅あらば、あの様ごもあつて、  
いやふ船のしやであるも、思へば行先のつらさ、敵  
子行く使者、火の中と知って飛び込め我身、王照君と云ふ  
人をわしくありて、知らず知らず去る婦連を覗き、氣の  
つきて天上を見れば、白骨入れたる曲物は目の着く。お  
れ又思の種と横みあれば、悪志い金を兵衛と鼻の合せ  
船中ぞさへ身な置く祀ありけり。

六章

既りて船は荒州灘の浪もゆるれ、二八と云ふ今月の風の  
強きよ、天子鼻り、底も落ち、砕くるは浪、散るは海草、深  
紫の色空をわすめて、白鷗の群飛んでいづかへ行く。二十何  
年の船も暮すと云ふ老水夫のいふ風を命ひを事のため  
て、いと騒が。船中の船客死ぬる、と叫ぶ聲。死なば  
親子三人、死んだる方余程多りと、お松の胸も千々を砕く  
る情の波、無常の風もゆるめけり。さて船紀州灘のわたり  
た頃には、ますます劇しく荒れ、今も沈没せし舟の中も、  
荒太郎泣き出さず静まらず。只さへ乳の足らぬ船子  
よひてはッカリと止りけり。ミルツの用意、千マシのひかへへ



さき船の中。おれが岸あそば、肩を守翫めさげある物。  
我身一ち立て兼ぬる時、お濱あそば、かるそは苦らむま  
じ。向馬のは甲ふびと、荒るは能く暗きあり、牛助え介ふ  
る物を、伯母の金五兵衛のつれある、知ふぬ顔その鳥軒。  
腹立ち、くやとヤ、子奪ま体を半分起せば、むかくと胸  
苦しく、其子、かッぱと打伏せたり。  
聞く枕下子たる婦草の聲。

「どうだへ、苦さうかへ、エ、心を太き子持して居るいと  
いけふいぜ。」

「……死ぬるものと母をなすは」  
「あんだ、そんな弱いきこはいけふい」

「でも、さんまよ動揺ッては兎ても……」  
「はて、だんいけふい、は靴子ねもり茲があるが、之  
でも飲むがい。エ、サウくと思ふが、余計苦いの  
ね……」

夫が親幼子着渡す聲。耳子傳はる母子思ひ出きて、荒ち  
即ちツかりと抱きよて、飯子泣く子、情よ泣く親。  
眼子聞く水去の叫び聲。

「撲滅がさらぬねッ」  
「浮代は澤山か」  
「死ぬるうま陸で陸地まつけら」  
「其陸地は……ア——雲より他子は見えふい」





無事よき事な。

八章

目入る山河、新しく。山と云ふ物待乳山を離形し、川は  
 隅田の様を深しと思ひたるに、中者。中よ夫は成長たぬか。  
 かねく話子聞きし、鎮守の森あれか。  
 車より近づき、お松は胸騒げ、お袋と云ふは如  
 何なる人か。金五兵衛の姉とあれば、定めしいぢや  
 く、ひつとく、おびくおれられる事と、身体よ力入れて、其  
 癖志の根を震を立て、一か二分、身を碎かる、かの如く。  
 程木の家、夫の世にたる家ながら、地獄よりサ落る由い、  
 車より降り、子やぐ門口、内よりは親類一同待合せて、  
 種々の頭教。まぐくと一間へ通され、客か主人か、

ふず。する内、金五兵衛がえきをもち、姑子引合され。これは分家の何某、次は従弟の又従弟。何某お何と既のさげつけ、何某人の長口上り、只何分よりく弱らます。ふ、か者で思はくまると述ぶるばかり。荒太郎は誰か、お骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。

\* \* \* \* \*

お骨を道にまき一回のお通夜、お松屋はさぞお苦しいおられ。たろろ、志願と慮なく休まると、進める人のありまより。

お骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。

失禮ながら、先づお骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。隣家の二間は、お通夜する人々、お骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。の文ありまが、姑の訃事と。

世の中は、お骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。お通夜の世が、お骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。

これお骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。さてもさても、お骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。二晩の三晩、お骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。かくまは、お骨の持佛間と治められ。泣き聲やふ、泣き声やふ。



夫が得弟に当ると云ふ お光と云ふ女 荒右衛門  
物事して後より申す

一 子と云ふ事無きイ お子だとはと サア お松さん  
お光さん

献儀文集 四十四号

正本

高野たけしとまはが

山伏の後字

能野たけしとまはが

野伏の本心

# 増補集記

江見水彦 依

小原越木戸の場

- 一 片岡八郎 市川思案次
- 一 玉置其郎 嵐 連五郎
- 一 菅原平左衛門 市川魚尾郎

本舞臺平舞臺に向ひ淡黄幕一上平本戸を見せ都て小糸  
越太本戸の体風音も遠くはなれぬ其音明くはしり  
より片岡の良立白帽子甲申好まありまて出でて花道に  
きれまてより

「如何にわかれまてさかくまてよせはは遠きまてな成りはさくぞ  
忠臣無二と思ひたる行る小方さへ心あめぬまて高野子出づる街  
道の闇航とまなされぬ亦北條方へ心なる通じ極悪無道  
の刃向びて宮子のさぞやは無念まておぼやみん〇あ  
れみ身ゆる太本戸は玉置屋を司が持場を聞く某芝道す  
承りし上かまは教の味才の様子のまてより 幸まより  
まば ささく

「ま〜〜ま〜〜あつて本舞臺まよか〜

「ヤー以内子物中〜せん 某事は片岡の席と申す物  
只今片所子土塔の宮ニは親王お通りあれま 本戸打

ひ〜ま〜逆戻本取のり方々お出おひめま〜

本戸の中〜

「何より土塔の宮がお通りあるとま

ト本戸の中より玉置屋はれ部 昔平をさつ 甲下向舞臺  
お〜〜ま〜た〜ま〜

「ヤーま〜ま〜あり片岡のま〜

「熊野三山よりのお船のお〜

「市存のま〜

「甲下向車間の座と六万母身なみかて尋ねぬま〜、親ま〜

「知りつ〜はれを通〜ま

「我々彼の

「後目がすま〜



「ヤー何事ぞ才と能勢三山の別当と何事ぞかど  
さく天福をまうしあす君の侍子に濟しむせあ  
三親王がお通しありあすや無禮なる事申す様  
ある

エ「ヤアツ

ウ「事らざるはさねば今の無禮はゆるくあせん

はやく本を聞かめされ

エ「サ一其儀は

ウ「いとお出まかりぬはぬか

エ「サ一それは

ウ「あれ程よ申しつゝもお出まかりぬは言後同敷  
大れ下のぬ事申す

玉「たんとんとてはるゝ

昔「百すま

エ「あありあるぬ

ウ「さばも様あす大いんいざよの身は悲あ

字のお威見せくれん

エ「まぼしとてはるか

ウ「あんでのさうま

エ「何をサキヤんか

と三人まうくさありありてド、三人本戸の中へ掛  
て入るい良ちな居てまうしる亦大儀申すまうし

「それ世の儀の事はやく片切りの影さへも山石  
砕けてあめはのちるたうと打響き叩す

と「極よ侍茶を希切つてはる

昔の所々見の場所

- 一 大塔宮 澤村眉山
- 一 赤松則祐 坂東漁山郎
- 一 村上義光 尾上 柳
- 一 八景の七雲 赤小忠楽次
- 一 野長郎六郎 尾上江見花
- 一 同 七亭 中村 虎心

本舞臺を二回の上組上手波布一を動かす下手松の樹。日  
 夜より松の釣枝よき帆日の月を出一部でサ  
 の所所の件直中よ大塔の言山伏淳子木の根を  
 を挿入西方村上義光赤松則祐同ドク少伏淳子下  
 手甲の言者おしよまうく物すれ相方百智をよおす

子あり

「ナリや義支まだ八景は歸らぬか

「いまねは歸る者ありませぬ

「道よまじりてあやむか伊は籠よりあやむか

「いづれよ〜ん〜ん心あらぬま〜ぢやぶア

(ソノトをさ)

雑録

○ 送川又彦孝陰三十一

と坐陰影は自然氣のあゝ仙人あり晴川の如

朝陽をうつらうつらと見たり  
るる寝さるる

京都のまへ

君よあぢいけや

うらやま

水陰

志望の夢ありて  
従事するの  
おぼろげに  
にはあはれ

冬枯や午向る社の見あはれ

水陰

水陰

之(流)

○寒に猶釣

うきうき風子舞ふ草の影

○元月

鶴一羽湖水より初日のよ

記事

7月書 小糸 蒹葭穂穂より現る車のかげあり

連、忠系、若鷗のそとて、月中、  
あり。  
三月二日、好まき若鷗縁の道、  
あり。

評書

の若鷗縁素人若鷗

澤村眉山

太平記子大塔のそと、  
りま、たれ裳万端中、  
が惜い事、  
お残念、  
お後子、

と立派んで、  
のけ、  
おれ、  
其、  
その、  
のお、

咲れ花

お、  
お、  
お、  
お、  
お、

お、  
お、

ふく〜 幼子種落と川と清三丸 古石評とあり  
手〜た 元来 山は 世其自のち終とよま はんか  
の 幼いおるんる 山は ちと 高が 勝ち 孫あり  
ハ才子子 雛鶴の 雲 十流の 評で 田より あり  
糸山 鬼丸の おの げ 以後 高の 終とよま 子うり  
ふく

市川 魚の 思卯

古平 ねく子 昔の子 手をうり 難お  
女 幼り 山 ちと 高の けで 世より あり 幼子子 孫あり  
山 高の 終とよま 孫あり 山 高の 終とよま 孫あり  
山 高の 終とよま 孫あり 山 高の 終とよま 孫あり

(ついで)

